

[エッセイ]

ギュンター・グラスの
「ドイツ」、「歴史」、「社会民主主義」

杵 渕 博 樹

[エッセイ]

ギュンター・グラスの
「ドイツ」、「歴史」、「社会民主主義」

杵 渕 博 樹

「アウシュヴィッツについて語る。語ろうとすること。これは、ギュンター・グラス Günter Grass (1927~) の歴史意識の前提条件である。語れない、と言ってはならないということ。それは、(主観的には) 批判的に顧みるといふ一定の指向に従った上でのことであったとしても、言葉の届かない、不可触の事象にしてしまってはならないということなのだ。この惨事は、神秘であってはならない。現実として、繰り返し認識されなければならないのだ。

日常のメカニズムの中に組み込まれ、整然と、計画的に「それ」が行われたということ、その匿名性に彼は注意を促す。「子供たちにアウシュヴィッツを説明しようとする父親の困難 Die Schwierigkeiten des Vaters, seinen Kindern Auschwitz zu erklären」(1970) と題した講演で、彼は「アウシュヴィッツ」という言葉の決まり文句化、言わば歴史的事実を代理して独り歩きを始める象徴的作用が、その問題の解明をより困難にしてしまう事態をも懸念している。例えば、しばしば感傷的に過ぎるアンネ・フランクの英雄化だけでは済まないということ、そしてそのヒロイズムのベールが、前述の「日常性」や「匿名性」というより本質的で深刻な問題を覆ってしまう可能性すらあるということだ。

個人と国家とを対象とした、過去の侵略と暴挙に対する賠償は、それらを二度と繰り返さないための歴史意識によって補完される。もちろん、ドイツだけが将来の加害者とならなければよいわけではない。ドイツ国民が、自らの責任として語り続けることは、他の国家、民族を含む全人類への警告としても有意義なものとなるだろう。

常に新しく生じてくる、より規模の大きい悲惨は、それ以前の悲惨を相対化し、

その規模の大きさを示す数値の抽象性は、必ずしも振り返る者の実感を喚起しない。このような事態に抗しつつ、それぞれの悲惨を風化させずに語るとは、一体どういうことなのか。

語り、そうすることで、何かを伝える。それは言葉への期待である。ヨーロッパの啓蒙の伝統に言及するとき、グラスは、暴力を克服する対話、そして、理論と実践の一体性を考えている。ドグマを許さず、常に軌道を修正し続けることが可能だとすれば、それは、異なる立場の間での対話が機能することを前提にせざるを得ない。対話によって相互の理解を深めることの重要性の認識は、政治のレベルでは、国内なら複数政党の存在（事実上全政党が政権党となるような大連立は、もちろん許されない）、外交なら地道な過去の清算と、対立を前提条件として固定しない共存の模索という基本方針（ヴィリー・ブランドのいわゆる東方外交など）を必然として導くだろう。グラスが、講演「民主的な社会主義のための七つのテーゼ（Sieben Thesen zum demokratischen Sozialismus）」（1974）で述べていることは、当時のソ連と東独を含む東欧諸国のスターリニズムへの批判としての性格が色濃いだが、その批判は、ソ連崩壊後の今日も、現代社会の様々な具体的困難に対応しようとする者に、各自の思想的立場の基本的性格を自問し、確認するための有用な視点を与えてくれる。

この「七つのテーゼ」は、なぜ社会民主主義なのか、ということについて直接答えるものではないが、それは、第六のテーゼで語られているように、民主的な社会主義が「始まり（Ansätze）」としてのみ定義されるという原則に対応しているとも言える。第七のテーゼは、ドグマを排除すべきことと、繰り返し、新しく定義しなおされるべきことを主張し、民主主義と社会主義の総合という展望が語られている。

グラスは、新ドイツ統一前夜、いわゆる民主化を求めるデモが東独で目立ち始めていたころ、シュピーゲル誌でのインタビュー（1989）で、彼のドイツ社会民主党（SPD）がドイツ社会主義統一党（SED）との関係を保っていることについて、かの政権党のみと連絡を取っているのではまずいが、彼らとも繋がりがあること自体は改革に資すると言っている。ここでは、政治的レベルでの国家統一

に反対していた彼の立場からすれば自明だが、東独の自主的改革、社会主義統一党自身の根本的変身への期待がある。前述の「テーゼ」の内、第一、第二のテーゼは、マルクス・レーニン主義を拒否して歴史の発展段階に応じて社会主義を語ること、共産主義者との協同の不可能性、レーニン主義的な党ヒエラルキーが、いつでもスターリニズムに転化しうることなどを指摘している。また、東西ドイツの統一に関してグラスの抱いていたイメージは、両ドイツそれぞれの、社会民主主義的国家への緩やかな変化を待つということだったようだが、第四のテーゼで強調される寛容さの保持、反対派の存在の容認は、そのプロセスでも前提となっていたはずだ。レーニン主義的体制は、第三のテーゼでも否定されている。ここでは、国家資本主義が、決して個人資本主義のオールタナティブではないという表現が取られている。どちらも、民主的コントロールから逸脱し、労働者の共同決定を拒絶するというのである。ただし、それらに代わるオールタナティブはこれ以上ははっきりした姿を見せてくれない。それは、現実の個々の問題に対する、過去の反省に基づいた具体的対応の中から自然に形成されてくるべきなのであろう。

グラスは、SEDのモドロウの示した、条約共同体的な両ドイツの結びつきの強化の提案も評価していた。政治的なレベルでの結合は、両主権国家の枠を残したままに進められるべきだ、というのがグラスの考え方であり、ドイツとは何かという問いに対しては、彼は「文化国民（Kulturnation）」という概念を好む。文化的なアイデンティティーの自然な形成が、ドイツ統一の望ましい経過なのであって、性急な政治的統一が、力による強制によって成立させられるのはよくないという立場である。また、グラスは自然環境の破壊の進行についても発言している。最新のロマン「雌ねずみ Die Rattin」（1986）でも、その設定の一つは核戦争後、人類の滅亡後（語り手が最後の生き残り）であり、森林破壊の惨状は重要なモチーフの一つとなっている。人類にとってのより深刻な問題のいくつかは、国境を越えており、最早国家の枠組みが障害でしかないような場合もありうるのだ。

「分裂したドイツに関する「再統一（Wiedervereinigung）」という表現は、そ

の、1937年当時のドイツの再現というニュアンスによって、ポーランドとの国境線の問題をも含めて、近隣諸国の警戒感を刺激した。かつてのドイツの復活を思わせる響き、その漠然とした後ろ向きの発想は、未来を指向する歴史意識を妨げかねない。グラスは、統一への意志を「過剰な感情」によるものだと警戒していた。「感情Gefühl」ではなく「理性Vernunft」を、そして「意識Bewußtsein」を、と彼は訴えた。二次大戦の結果として失われた故郷についての思いを、彼は単なる喪失としない努力をしている。マルティン・ヴァルザー Martin Walser の、「ケーニヒスベルク Königsberg」が最早ドイツ領ではないことに関する、一種感傷的な態度に対して、グラスは、彼自身のダンツィヒ Danzig への思いを語る。彼は故郷を愛しているし、それは確かに喪失ではあるが、ドイツ領でなくなったことによって、良くなったこともあるというのだ。彼は、ドイツ領となる以前の、ポーランド領としてのダンツィヒの長い歴史を想起する。それら失われたドイツを思う時、人々が溺れがちな感情は、「統一」を求める圧倒的な風潮と共通のものだったに違いない。グラスは、それを理性で克服しようと言っているのである。彼はドイツの国土の美しさを讃えもするし（詩「昔々あるところの一つの国がありました Es war einmal ein Land」（「雌ねずみ」より）など）、しばしばドイツへの愛着を語る。「感情」は否定されているわけでは決していないのだ。しかし、最も悲惨な事態を思い、それを出発点にすることによってしか、人間性の基準を探ることはできない。「感情」がいかに自然なものに見えたとしても、最悪の事態に通じる発想の芽を根気よく摘み続けることを課題とするグラスにとって、それは無条件で容認できるものではないのだ。「ドイツ」への愛を語ることは、そのまま、「ドイツ」とは何かを問い直すことでなければならないのだ。（講演「ドイツ人の祖国とは何か Was ist des Deutschen Vaterland?」（1965）がこのテーマを扱っている。）

感情に流されずに、ドイツ人にとって、そして近隣の諸外国にとってよりよいドイツのあり方を選ぶための理性は、より具体的には、まず東西ドイツの戦後史を総合できるような歴史意識の確立を目指す。講演「ドイツ——二つの国家——一つの国民? Deutschland - zwei Staaten - eine Nation?」

（1970）では、明らかに力の集中を意味する政治的統一の前に、二つのドイツが果たすべき課題が挙げられている。その第一は、両国家の現代史とその結果に決着をつけることであるとされる。ここで、グラスは、東独もまた、西独と同様、第三帝国の後継国家であることを認めるべきであることを主張している。ワルシャワ条約に基づく東独人民軍の進駐などによって、東独が新たなプロイセンとして東欧諸国から不信の目で見られかねないことへの言及は、スターリニズム体制への批判と同様、当然ながらドイツの過去に対するその姿勢への批判にも通じている。第二の課題としては、当時の東西対立の下で、緊張緩和のための「平和的共存」に実質を与えること、が挙げられる。そして、米ソを中心とする軍事ブロック体制に風穴を開ける作業が、まさに、ドイツの国民という概念に新しい内容を与えるだろうと言うのである。第三の課題は、平和と紛争に関する、共産主義、民主主義それぞれの観点からの共同研究、第四の課題は、第三世界への共同援助活動である。これは、その活動が軍事ブロックの新植民地主義に陥らないことを前提としているが、もし実現すれば、そのこと自体が、「ドイツ国民の二つの国家」による古いナショナリズムの克服になり、他の分裂国家（南北朝鮮など）における対立の解消の助けになるだろうとの期待をかけられている。

現実には、誰も予期しなかったほど急速に、東独は消滅したわけだが、そのような情勢の変化にも関わらず、性急な統一に反対したグラスの立場を支えた思想は、統一後のドイツの抱えるところとなった様々な社会的問題を考える際にも、有効性を失ってはいない。彼が「負担調整 Lastenausgleich」という言葉で表現している。西独市民の東独市民に対する負債の返済は、今まさに、具体的実行を迫られていると言えるし、結果的には統一の引きがねともなった東独の一連の「民主化」に対する、「ドイツ初の人民革命」という評価も、非暴力的啓蒙と修正主義の積極的可能性、まだ終わったわけではない社会主義の実験の一つの展望を与えるものとして今日なお正当であり続けている。確かに、貧しい占領国つ連によって、ナチスドイツの侵略の代償を身をもって徹底的に払われ続け、スターリニズム的抑圧の下で、議会民主主義的な選択、修正の機会を長期間に渡って持つことのできなかつた東独に対し、アメリカの庇護の下で「奇跡の復興」をとげ

た西独が十分な「負担調整」を行わないまま、事実上の吸収合併が行われてしまったことについては、グラスの警告は無駄になってしまったと言える。しかし、本質的にはナチ時代と変わるところのない、国力の膨張への欲求と一体化したドイツ意識が、彼の唱える「文化国民 Kulturnation」意識とはほど遠い、民族主義的国家主義が、具体的な力となって本格的に現れてくるのを防ぐための戦いはこれからなのだ。グラスの祖国意識は強烈であり、ドイツ語で書く者としての責任感もまた大きい。彼は、「祖国ドイツ」という概念の獲得を重視する理由として、その概念の欠如による「真空状態 Vakuum」の危険性を挙げる。若い世代におけるこの概念の欠落、「祖国とは何か」という問いに対する無関心は、国の内外に悲惨な結果を導きかねない、差別的、暴力的民族主義に対する免疫の欠如でもあるのだ。

このような自覚の下に、「ドイツ」を問い続け、二つのドイツによる過去への誠実な対応を模索し続け、二つのドイツによる一つの歴史の構築を提案し続けてきたグラスは、彼のモットーである民主的社會主義に関しても、二つの社會主義（あるいは社會主義政党）の総合について語っている。

1970年の5月1日、『その他にエアフルトの意味するもの Was Erfurt außerdem bedeutet』と題される講演で、グラスは、社会民主党の歩みを、修正主義論争を軸に振り返っている。彼はドイツの分裂している現状と「再統一願望」の拒否から語り始め、1970年と1891年のエアフルトに視点を据える。ブランドとシュトフが一緒に写った最新の写真の解説を入り口にして、ドイツ社會主義の歴史は、一気に1891年のエアフルト党大会まで遡られる。エアフルト綱領は、理論部分をカウツキー Karl Kautsky が、実践部分をベルンシュタイン Eduard Bernstein が担当しており、それらの部分相互の矛盾が、修正主義論争、党の分裂の出発点だったのだ。グラスによれば、この矛盾は、そもそもマルクスの思想自体が内包していたものである。「跳躍する蝸牛はいない Es gibt keine springenden Schnecken」（文献2, S.84）。グラスは革命を否定する。ロンドンの亡命者と、現場で戦うドイツの労働者との認識のずれが、既にドイツの労働運動、社會主義運動の分裂を準備していた。グラスはベルンシュタインの具体的、実践的な

思考を高く評価する。女性参政権や死刑廃止の要求の先進性は、労働者、女性の置かれた社会的状況の改善を第一義的に考える姿勢によって得られたものだ。議會を労働者の戦いの場として重視し、プロレタリアート独裁や、資本主義の自己崩壊を信じる立場に対して一早く反対を唱えたベルンシュタインは、社會主義者グラスにとって一つの模範なのだ。「修正主義」という中傷のための決まり文句は、ユーゴのチトーイズムに、プラハの春に、中ソの緊張時に必ず登場したが、そのレッテルは、却って民主主義的な理性の印となった。グラスは、誇らしげに、自らを修正主義者と呼ぶ。

日常的なレベルでの、社会形態 Gesellschaftsform の変革こそが、常に社会民主主義者の課題なのだ。ベルンシュタインの協同組合主義を、グラスは共同決定のモデルであるとし、共産主義、個人資本主義双方のオルタナティブになりうるとしている。「革命理論」は、余りにも多くの犠牲を要求してきた。グラスは歴史に学べと言う。1970年、SPD のヴィリー・ブランドとSEDのヴィリ・シュトフのエアフルトでの会見に、彼は特別な歴史的意義を見る。同じ強制収容所で、共産主義者と社会民主主義者は共にナチによって殺されたのだ。二人の政治家の対話は、一つの歴史、「ドイツ」という歴史を、共に改めて認識しなおすことによって、社會主義内部でのイデオロギーの対立を乗り越える可能性の高まりを象徴しているのだ。それぞれの国内に頑な反対者(グラスはシュトラウスとホーネッカーの名を挙げている)を抱えながら、彼らの対話は東西対立を相対化するので。グラスは、エアフルトで始まった分裂の克服の兆しが、再びエアフルトに現れた、と言う。ドイツ統一への悲願を背景として、彼は社會主義運動の分裂の歴史を語った。グラスにとって、分裂したドイツの統一は、分裂した社會主義運動の統一によって進められるべきであり、両ドイツの真の対話は、社會主義政党同士の真の対話によってこそ内実を得るべきだったのだ。なぜなら、そこにしか、個人資本主義をも、國家資本主義をも越える、新しい抑圧装置を必要としない思想は生まれえないはずだったからだ。

ソ連の崩壊によって、冷戦体制は終焉した。少なくとも、決定的変質を遂げた。東独に芽生えた新しい社會主義の可能性は潰え、非暴力の人民革命は統一の渦の

中へ消えていった。その過程は、グラスを少なからず落胆させたに違いない。しかし、彼流の「蝸牛」型思考に則った社会主義の実験は決して終わらないだろう。現在の具体的困難に対し、具体的解決策を考えること、常に歴史を振り返りつつ方向を修正し続けること、対立する者との対話を決して諦めないこと、これらの一市民としての自覚が、その、言葉を不可欠とするプロセスの故に、作家としての自覚と結び付いている点に、我々は注意を向けるべきだろう。議会制民主主義体制が、その下で暮らす人民に否応なく分け与えるところの政治的責任は、歴史を語る言葉なくしては果たされえない。言葉を追求する者には、より一層の歴史的、政治的自覚が要求されているのだ。

文献.

1. Günter Grass, Werkausgabe in 10 Bänden, Band VII, Band IX. Luchterhand 1987
2. Günter Grass, Deutscher Lastenausgleich – Wider das dumpfe Einheitsgebot, Reden und Gespräche. Sammlung Luchterhand 1990